

地域協働ミーティング

「ウイルス対策を伴う災害避難の現状と取り組むべき課題」を開催

主催：神奈川工科大学 地域連携・貢献センター 共催：神奈川工科大学 地域連携災害ケア研究センター

7月22日(水)、本学 地域連携・貢献センター室(E1号館4階401室)にて、神奈川工科大学 地域連携・貢献センターが主催、地域連携災害ケア研究センター共催による、地域協働ミーティング「ウイルス対策を伴う災害避難の現状と取り組むべき課題」が開催されました。同ミーティングは、今年4月に発足した地域連携・貢献センターの初めての取り組みであり、新型コロナウイルスの感染拡大が心配される中、九州で発生した豪雨災害を踏まえて、小宮学長と小川センター長(本学名誉教授)の「先延ばしはせず、即動かねばいけない」という強い思いで急遽企画されました。

当日は、感染防止対策を十分に講じ、本学関係者をはじめ、地域、行政、企業から約20名が地域連携・貢献センター室にて参加。希望者はリモートで聴講するという実験的なスタイルでの実施となりました。

前半は、最初に地域連携災害ケア研究センター長で、日本災害時透析医療協働支援チーム JHAT 事務局長でもある山家特任教授(健康医療科学部 臨床工科学科)から、7月に発生した九州をはじめとした水害での医療対応についての報告があり、次に、厚木市危機管理課より、風水害時の避難所設備や備品の現状、また、コロナ禍での取り組みや課題などをご説明いただきました。続いて、本学の教員3名から、次のとおり、現在取り組んでいる避難所関連研究の発表がありました。

発表内容

- 本学における震災指定避難所の基本的な対策及び感染対策への課題
健康医療科学部 看護学科 杉山洋介 講師
- 避難所におけるバーテーションの役割と音響対策について
情報学部 情報メディア学科 上田麻理 准教授
- 避難に際して ICT の効果的な役割を求めて
創造工学部 ホームエレクトロニクス開発学科 安部恵一 教授



後半は、厚木市・福祉行政に携わる方々から「要支援者をいかに守るか」という視点で、また、地元2地区の自治会長からは、避難所開設に関する不安などについて、さらに NTT アドバンステクノロジ株式会社 まちづくりユニット 担当者からは産学官民連携による災害対策の必要性についてのご発言がありました。

最後に、「災害と命を守る行動・・・災害時に人々を救出する様々な問題は新しい技術で乗り越えられる。だからこそ、継続した取り組みや産学官民の連携が必要」と小宮学長にとりまとめでいただき終了しました。

5大学連携・協働協議会主催 学生 Zoom ミーティングを開催

With コロナ期を
めげず、元気に過ごそう！
ちょっとしたコツや心構えを話し合おう

新学期早々に新型コロナ対策に突入してしまいました。そこで厚木市大学連携・協働協議会を構成する厚木市内の5大学(湘北短期大学、東京農業大学、東京工芸大学、松陵大学、神奈川工科大学)の大学サイドの担当者と厚木市の担当者が、学生たちの顔合わせの場として企画したのがこの Zoom ミーティングです。

連携つながりで、神奈川工科大学の地域連携・貢献センター長と厚木市企画政策課の担当者が進行を担当してもらいました。

9月9日(水)の午後の約2時間、5大学の学生会員の学生がPCやスマホで顔合わせし、各大学の授業の方法やリモート授業のメリット・デメリット、自粛期間中の過ごし方等を披露しました。

いろいろな意見がでました。下記は披露された意見の一端です。今後は、自分たちでつながって、活動をしていくそうです。やはり、学生自身もどうやったら「つながれるか」考えていたそうです。



- 満員電車での通学の苦労もないし、それだったらzoomでもいいと思う。対面授業の意味って何だろう・・・
- 実習や実験、グループワークができないのがつらい。
- 人間関係が築けなまま、リモート授業に突入した1年生は友達と頼りあえないから大変だと思う。
- 知識学習、調べ作業に図書館利用ができないのは厳しかった。
- 自分のペースで取り組めたのはよかった。
- 新型コロナと共存しないと生きていられない。くよくよして、いられない。

神奈川工科大学
KANAGAWA INSTITUTE OF TECHNOLOGY
地域連携・貢献センター
〒243-0292 神奈川県厚木市下荻野1030
TEL 046-291-3153 FAX 046-291-3262
E-mail chiiki-koken@cclm.kanagawa-it.ac.jp
URL https://www.kait.jp/
[kait] 検索

編集後記

若葉と若さ溢れる学生集団・・・そんなキャンパスの光景を楽しみにしていた地域連携・貢献センターの開設でしたが、現実・・・地味な幕開けでした。やっとパンフレットが出来上がり、ニュースレターも発行することができ、感無量です。CHALLENGE、CHANCE、COMMUNICATION-Logoに重ねた3つのCにCONTINUE(継続)を付け加えられるといいな。

幸世



地域連携・貢献センター

ニュースレター

創刊号
Vol.1



地域連携・貢献センターの 発足にあたり

神奈川工科大学 学長 小宮 一三

このたびの本学地域連携・貢献センターの発足にあたり心よりお祝い申し上げます。

本学は建学の理念を「科学技術立国の発展に貢献する人材の育成とともに地域社会との連携強化に努める」と定め、また本学の長期ビジョンの一つとして「地域連携・地域貢献の重視」を掲げ、地域との関係を大事にしている大学であります。今日まで神奈川県、東京、厚木市の行政や住民の方々や協働で様々な連携・貢献活動を行い、多くの成果を挙げてまいりました。

地域連携・貢献センターは、本学の実施している地域連携・貢献の活動を広く知っていただくこと、SDGsやグローバルを視野にいたれた地域活動の新たな企画の提案や調整を行っていくことを目的に開設いたしました。このような活動を通じて本学が「真に地域から頼られる大学」となることを目指していきたいと思っています。

センター組織には、センター長に小川喜道地域連携統括コーディネータ、補佐役コーディネータに今井幸世氏を置き、学内の地域活動関連教職員が参加する地域連携調整部門、学外連携・協定推進部門、地域課題への連携取組み部門を配した充実した体制となっています。

現在、世の中はコロナ禍で先が見通せない状況にあり、また人口減や環境問題など様々な課題も抱えています。このような時代こそ、地域の人々が力を合わせる必要があります。本センターの役割が今後益々重要となっていく中、大学としてしっかりと支援していきたいと考えております。センター長はじめ皆様のご活躍を期待しております。

ごあいさつ 地域連携・貢献センター長 小川 喜道



地域連携・貢献センターのニュースレターをお手に取っていただき、ありがとうございます。学生、教職員の皆さんにとっては課外活動や研究活動、その他多様な取り組みを通じて、地域のために積極的に貢献してくれていますが、当センターでは、それらの活動を必要に応じて協働し、時に側面的支援をすることで、研究・教育・社会貢献の活動のさらなる促進を応援していきます。

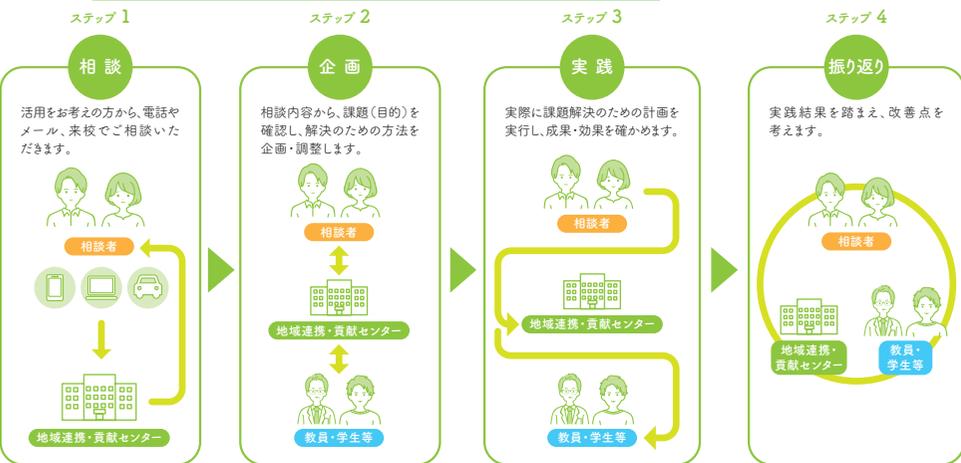
神奈川工科大学は、SDGs(持続可能な開発目標)の趣旨に賛同し、その到達目標に向けて、教育・研究等を包括的に活用し取り組むこととしています。このSDGsは、「誰一人取り残されることのない」社会の実現にあります。地域連携・貢献においても、取り残されている課題に取り組むことが必要となっていると思いますが、当大学には5学部13学科、17研究所/センターなど教育研究から附属図書館、KAIT工房、各種スポーツ施設などが機能しています。国連が掲げている到達目標の2030年に向けて、可能な限り大学の持つ知見を効果的に活用し、学生、教職員、そして地域社会の方々と共に、その目標実現を図っていきます。そのためには、各学部・学科、センター、機関、施設、部署などとのつながりを基盤にして、創造的で新規性をもった社会貢献を果たしていけるよう努力していきます。

なお、ロゴについてはこのニュースレターの中で説明されていますが、私の強調したいことは、アルファベットの「C」です。手話では、両手の指を丸めてCの形を作り、向かい合わせ、連結器のような形にして前後させる動作をして、コミュニケーションという言葉表現します。当センターは、地域と大学をお互いにしっかりとコミュニケーションできるような協力していきたいと思っています。地域から気楽に声をかけていただきたいと思いますし、学生、教職員からも地域とつながるための相談を積極的に受けていくつもりです。

それでは、今年度からスタートした地域連携・貢献センターをどうぞよろしくお願ひ致します。

● センターの活用方法

相談・協働検討：無料



プライバシーポリシー 地域連携・貢献センターの事業に関して、取得した個人情報は「神奈川工科大学個人情報保護規程」及び、その他の法令を遵守し、適正に取り扱います。



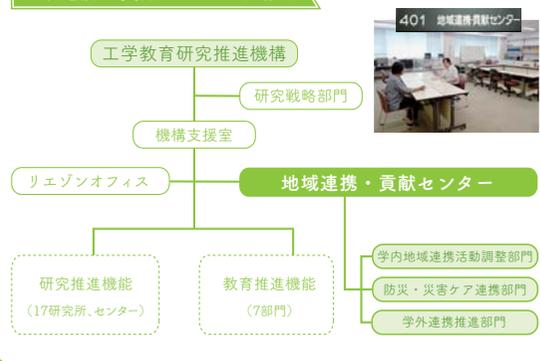
CENTER for
REGIONAL COOPERATION
and CONTRIBUTION

ロゴ“3つのCとつながり手”

3つのCにはCHALLENGE(挑戦)、CHANCE(好機)、COMMUNICATION(話し合い)の大事なCを重ねました。当センターは人と人とのコミュニケーションを大切に、さまざまな立場の方々と手を携え、地域のニーズに応じていきます。今日的な課題に取り組み、豊かな社会づくりに貢献するために必要な「つながり」そして「つながる」を表しています。



地域連携・貢献センター組織図



連携・貢献活動のいろいろ

